

清学書に現れた満洲語ハングル表記について
—特に満洲字 e に対する 2 通りのハングル表記をめぐって—

岸田文隆

目次

1. 序
2. 資料
3. 清学書に現れた満洲字とハングルの対応関係とその流動
4. 満洲字 e に対する 2 通りのハングル表記についての考察
5. 結論

1. 序

現伝する朝鮮司訳院刊行の清学書（満洲語学書）には、満洲語をハングルによって表記している部分が見られるが、この満洲語ハングル表記は、当時の満洲語の発音をうかがい知るうえで、貴重な資料を提供するものと考えられる。本論文は、これら清学書において、満洲字 e に 2 通りのハングル表記がなされている現象をとりあげ、これが当時の満洲語の発音上のちがいを示すものであることを主張したものである。

清学書に現れた満洲語ハングル表記は、体裁上、大きく、次の二種に分けることができる。

(1) 満文に併記されたハングル表記。

これは、基本的に、満文に対する表音を意図して施されたものと思われる。これには、読本類（「小児論」、「八歳児」、「清語老乞大」、「三譯総解」）と、「漢清文鑑」の見出し語に付されたハングル表記が該当する。

(2) 満文がなく、ハングル表記のみがあるもの。

これは、満洲語の発音を示すだけでなく、元の満洲字の復元を可能とすることを意図して書かれたものと思われる。この種のハングル表記は、各満洲文字と転写ハングルが概ね 1 対 1 に対応するように配慮がなされ、ハングル 28 字母をもっては表せない満洲字の区別（例えば r と l の区別）については、特別の区分符を施すなど、より転字的な性格が強められている。これには、「同文類解」と、「漢清文鑑」の細注のハングル表記が該当する。

(2) の満文が併記されていないハングル表記は、上述のとおり、概ね、各満洲字と転写ハングルが 1 対 1 に対応するように作られているが、若干の文字について

は、複数の満洲字が1つのハングルに対応することがある。例えば、「同文類解」では、満洲字ㄱが連続して現れる場合に、前のㄱは^oと転写されるが、このハングル表記は、ㄱ i および特殊字母の sy の転写にも用いられる。

1) a ㄱ ㄱ a m b i : 아^o쌔비 (動く) [同文類解: 上/29a]

2) ㄱ i b i t h e : ^o 빔히 (詩) [同文類解: 上/42a]

3) s y ㄱ u b i t h e : ^o 슈 빔히 (四書) [同文類解: 上/42a]

このような場合においては、当該のハングル表記が果してどの満洲字に対応するものであるかを、にわかには判断できないこともあり得る¹⁾。以上の理由から、本論文においては、それぞれのハングル表記に対応する満洲字が明記されている(1)の資料のみを考察の対象とし、(2)の資料については、後日の課題とすることとした。

上に述べたところのように、(1)の部類のハングル表記は、併記された満文の発音を表すことを目的として付されたと予測されるものであるが、これら資料を全般的に観察してみると、それは、必ずしも、当該単語の発音を、実地に清人に当たって、直接聞いたとおりに書いたというのではなく、併記された満文の字母一つ一つに、機械的にハングルを代入して得られたものではないかという感想を得る。そのハングル表記は、併記されている満文の語形に、極めてよく一致する。例えば、「三譯総解」において、その満文は、時に、同一の単語に対して異なった語形を示すことがあるが、このような場合にも、そのハングル表記は、それぞれ、併記された満文の語形にしたがっている。

4) d o m e : 도머 do-mə (越えて) [4/1a/4]

5) d o o m e : 도머 doo-mə (越えて) [3/16a/2]

6) n i n g g u n d e : 빔준 더 niŋ-gun-də (上に) [2/10a/3]

7) n i n g g u d e : 빔구더 niŋ-gu-də (上に) [4/13a/1]

要するに、(1)の部類に属する資料と雖、その満洲語ハングル表記は、概ね、併記された満洲文字をただ単にハングルに置換えただけのもので、極めて転字的な性格が強く、満洲語の発音に関して独自の情報を提供するものではない。

しかし、第3章において述べるところのように、ある満洲字に対しては、場合場合によって、いくつかの異なるハングル表記が見られることがある。このような場合は、あるいは、満洲字の字面には現れえないような満洲語の発音の区別を表したものであるかも知れず、考察の対象となりえよう。本論文は、そのような、転写ハングルの一様さを欠いている特殊な場合の中から、特に、満洲字 e に対して2通りのハングル転写が行われている現象をとりあげ、考察を加えたものである。

2. 資料

本論文において、考察の対象とした資料は、読本類に属するところの「清語老乞大」・「三譯総解」・「八歳児」・「小兒論」の4者である。滿文に併記された滿洲語ハングル表記の資料としては、前章で述べたように、このほかに「漢清文鑑」の見出し語があるが、この資料については、まだ調査を完了していないので、本論文では取扱わない。いま、本論文で取扱った前4者の資料の書誌的概要を略記すると以下のとおりである。

(1) 「清語老乞大」8巻

現伝の版本は、乾隆30年乙酉(1765)すなわち英租41年に、清学訳官金振夏の監修によって平壤監營から重刊されたものであるが、その原刊本は、朴昌裕等の損財によって、康熙42年癸未(1703)すなわち肅宗29年の9月に、以下の「三譯総解」・「八歳児」・「小兒論」と共に、開刊された²⁾。しかし、本書がその以前に既に出上っていたことは、「通文館志」(2巻)科挙清学の注に

「初用千字文・兵書・小兒論・三歳児・自侍衛・八歳児・去化・七歳児・仇難・十二緒國・貴愁・吳子・孫子・太公尚書並十四冊、兵燹之後只有仇難・去化・尚書・八歳児・小兒論五冊、故抽七處寫字以准漢學冊數、康熙甲子始用新編老乞大・三譯総解、而前冊仇難・去化・尚書訛於時話故並去之、見啓辭膳録」

(下線は引用者、以下同様)

と、康熙甲子(1684)に本書が始めて用いられたという記事が出ており、また「三譯総解原序」に

「今上即位之七年庚申老峯閔相國堤學譯院、以繼黯所刪書字少語不廣無以會其通而盡其變、令崔厚澤・李~~歲~~・李宜白等更加釐正、刪去化・仇難・尚書三冊而取清書三國志、相與辨難、作為三譯総解十卷、又解漢語老乞大、為清語老乞大八卷」と、肅宗即位七年庚申(1680)には既に本書編纂の計画が進められていたと記されていることから、確認できる。「清語老乞大」が開刊・改刊された理由は、

1) 開刊：上掲の「通文館志」の記事に、以前の用書が「訛於時話」であったとあり、また上掲「三譯総解原序」に、「以繼黯所刪書字少語不廣無以會其通而盡其變」と記されていること、また、

2) 改刊：「清語老乞大新釈序」に

「若老乞大則始出於丙子後我人東還者之因語生解、初無原本之依倣者、故自初已不免齟齬生澁、而今過百季又有古今之異、假使熟於此書亦無益於通話之實、從事本學者多病之、庚辰咸興譯學金振夏因開市往留會寧、與寧古塔筆帖式、質問音義、辨明字畫、凡是書之徑庭者改之、差謬者正之、翌季開市時復質焉、則皆以為與今行話一一吻合、自此諸譯無所患於舌本之間強」

とあり、「重刊三譯総解序」に

「顧清語在今諸方語為用最緊、而舊有老乞大・三譯總解諸書、歲月浸多、卷帙散逸、字句音釋亦不無古今之異、學者病之、金公振夏以善清語名、先以老乞大就質於清人之習其書者、筵白而刊行之、繼又考校三譯總解、刪其訛誤、獲成全書」と、明記されていることに求めることができよう。すなわち、古い語法をその当時の語法に改め、また語彙を拡充して実地の通話に不足のないようにするためであったと考えられる。このことは、朝鮮司訳院訳学設置の所以が四方の語に通じ事大交隣するという極めて実用的なところにあったことから、容易に理解されることと言わねばならない。

「清語老乞大」の成立において、特記すべきことは、これが、元来、既製の満文テキストを底本として作られたものではなく、朝鮮において独自に翻訳・編纂されたという点である。そのことは、上掲「清語老乞大新釈序」に、

「若老乞大則始出於丙子後我人東還者之因語生解、初無原本之依倣者、故自初已不免齟齬生洪」

と、明記しており、また、「三譯總解原序」に、

「解漢語老乞大、為清語老乞大八卷」

と、漢語の老乞大を翻訳して作ったことを伝えていることから知ることができる。

(2) 「三譯總解」10卷

現伝の版本は、乾隆39年甲午(1774)に、金振夏によって重刊されたものであるが、その原刊本は、「清語老乞大」等と共に1703年に刊行された。しかし、本書もまたその以前に既に出て来た上がっていたことは、上掲の「通文館志」(2巻)科挙清学の注・及び「三譯總解原序」の記載によって確認できる。本書の開刊・改刊の理由もまた、上に述べた「清語老乞大」のそれと略々同じものと考えられる。

「三譯總解」は、その原序に、

「而取清書三國志、相與辨難、作為三譯總解十卷」

とあるように、満洲語に翻訳された三國志(演義)を底本として作られたことは明らかであるが、それが、果たして、どの版・稿本であったかは、未だ詳らかにされていない。三國志演義の満洲語翻訳には、およそ2種類の版本(順治7年(1650)刊行の満文本と、雍正年間刊行と思われる満漢合璧本)があるが、筆者が、「三譯總解」の満文を、この両版本と対照してみたところ、「三譯總解」の満文の内容・語形等は、概ね前者(満文本)と一致することが確認された。したがって、「三譯總解」の底本となったのは、おそらく、前者(満文本)の方であったろうと考えられる。ただ、「三譯總解」の満文は、その底本(満文本)の内容・語形等をそっくりそのまま踏襲しているわけではなく、ところどころ、底本(満文本)と相異を示す部分が見出だされる。本論文の筆者は、このような底本との相異が生じた主な

る原因は、「三譯總解」が朝鮮司訳院において編纂される際に、その底本（満文本）が依拠したもの〔嘉靖本〕とは異なる版に属する、三国志演義の漢文版本〔おそらく李卓吾本に類する版本〕を参照して、独自の改変が行われたためであろうと推測する。すなわち、「三譯總解」とその底本（満文本）の間に相異が見られる部分において、底本（満文本）の方は嘉靖本の内容に一致するのに対し、「三譯總解」の方は李卓吾本の内容に一致するのである。そのような、底本と相異を示す部分において、時に、「三譯總解」が、満洲文語の規範的な語形とは相異なる特殊な語形を見せることがあるが、興味深い現象である。なお、「三譯總解」の底本問題等の詳細については、近刊の拙論を参照されたい³⁾。

（3）「八歳児」1巻

現伝の版本は、乾隆42年丁酉（1777）に、金振夏の監修によって重刊されたものであるが、その原刊本は、「清語老乞大」等と共に、1703年に刊行された。しかし、本書の由来はさらに遡ることができ、「訳官上言膳録」己卯（1939）5月11日には、本書がもと女真学の用書であったものを、申繼黯によって満洲字に写出された旨が記されている。

「本學中有才申繼黯、（中略）傳來冊本中所謂巨化・仇難・八歳児・小兒論・尚書等五冊、以清書寫出而清旁註質之」

本書の原典については、いまこれを詳らかにする術を持たない。

（4）「小兒論」1巻

現伝の版本は、乾隆42年丁酉（1777）に、金振夏の監修によって重刊されたものであるが、その原刊本は、上の3書と共に、1703年に刊行された。しかし、本書の由来が、さらに古く女真学にまで遡ることは、上の「八歳児」と同様である。

本書の原典等については、「八歳児」の場合と同様、女真学用書がすべからず逸書に属する現状においては、これを詳らかにする術を持たない。ただ、このことに関連して、一言付言しておくべきことは、既に関（1964）が指摘したところのように、本書と大同小異の内容を有する漢文の「小兒論」が存在するということである。すなわち、清学書の「小兒論」は、金国・あるいは朝鮮で独自に創作されたものではなく、漢籍からの翻訳にすぎない。関（ibid.）は、敦煌変文中に見出だされる「孔子項託相問書」と称する一連の文書が清学書の「小兒論」と相似した内容を持っていること、さらに、漢文「小兒論」の明代萬曆年間の刊本が伝わることを報告している。漢文の「小兒論」は、相当に流布されたものの如く、日用類書の類にもしばしば収録されている⁴⁾。清学書の「小兒論」は、そのように広く伝えられていた漢文の「小兒論」を、金国・あるいは朝鮮において、女真語に翻訳したもので

あったと思う。

3. 清学書に現れた満洲字とハングルの対応関係とその流動

満洲字 e に対する 2 通りのハングル表記についての考察を行う前に、まず、清学書における満洲字と転写ハングルの対応関係の一般を示す必要がある。ここでは、「三譯総解」を例にとり、観察を行うこととする。本論文で取扱った資料、すなわち読本類に属するものは、資料相互の間に、満洲字と転写ハングルの対応関係のさしたる違いは認められない。ただ、本論文では取扱わなかった、辞書類の「漢清文鑑」の見出し語に付されたハングル表記は、読本類のものとは面貌を一新しており、いくつかの満洲字に対しては、異なった転写ハングルを使用している。例えば、満洲字 f に対して、読本類に属する資料はハングル ㅍ p をあてるが、辞書類の「漢清文鑑」はハングル ㅂ β をあてる。このような清学書間の転写ハングルの使用法の違いは、各資料の性格を解明するうえで、いずれ、取扱わねばならない問題であるが、ここでは触れないこととする。将来、「漢清文鑑」についての調査を終えてから、考察してみたい⁵⁾。

「三譯総解」の満洲語ハングル表記に見られる満洲字とハングルの対応関係は、以下のとおりである。

(1) 母音字

a : ㅏ a	amargi : 아말기 'a-mar-gi (後ろ) [1/1b/1]
e : ㅓ e	ebšeme : 업셔머 'əb-syə-mə (急いで) [1/1a/2]
: ㅡ w	sembi : 슌비 sum-bi (言う) [1/2a/1]
i : ㅣ i	ilibufi : 이리부피 'i-ri-bu-pi (止どめて) [1/1a/2]
o : ㅗ o	morin : 모린 mo-rin (馬) [1/1a/6]
u : ㅜ u	uba : 우바 'u-ba (ここ) [1/1a/2]
ū : ㅜ u	sarkū : 살쿠 sar-ku (知らない) [1/2a/3]
: ㅓ u ə	jiyangjiyūn : 장원 jaŋ-jyūn (將軍) [1/2a/3]
oo : ㅗ o o	boode : 보더 boo-də (家に) [1/1a/4]
ai : ㅓ ai	uthai : 운해 'ud-hai (ただちに) [1/1a/5]
ei : ㅓ ei	eitereme : 에터러머 'əi-tə-rə-mə (いかに) [1/6a/5]
: ㅓ wi	ašasei : 아샤 시 'a-sya swi (嫂らの) [2/18b/4]

o i : ㄴ o i g o i d a m e : 과다머 g o i - d a - m ə (ながらく) [1 / 6 a / 4]
u i : ㅈ u i d u i b u l e c i : 뒤부러치 d u i - b u - r ə - c i
 (比べれば) [3 / 8 a / 1]

ū i : ㅈ u i h ū i : 휘 h u i (會) [6 / 1 a / 2]

o o i : ㅈ o o i b o o i : 부 b o o i (家の) [1 / 5 b / 2]

a o : ㅈ a o t s a i m a o : 채 맛 c a i m a o (蔡瑁) [4 / 1 a / 3]

e o : ㄱ e o s e o l e : 선러 s e o - r ə (推察せよ) [1 / 4 a / 1]

 : ㅈ h e o : 호 h w o (侯) [5 / 4 b / 1]

i o : ㄱ i o b i o : 빔 b i o (有るか) [1 / 6 b / 3]

注) 「小児論」には、滿洲字の i o を ㅍ y u で転写した例が見える。

n i o n g n i y a h a : 농냐하 n y u ㄱ - n y a - h a
 (がちょう) [小児論 : 10 b / 4]

i o i : ㅍ i o i s i o i c a n g : 쉬 창 s i o i c y a ㄱ (許昌)
 [9 / 19 a / 1]

 : ㅍ y u i l i o i b u : 뉘 부 r y u i b u (呂布) [1 / 1 b / 1]

i o w a : ㅍ y o a

u i o w a i : 우 왜 ' u ' y o a i (吳越) [3 / 10 b / 5]

h i o w a n d e : 환더 h y o a n - d ə (玄德) [10 / 25 b / 3]

(2) 子音字

n : ㄴ n n i m e k u : 니머쿠 n i - m ə - k u (病) [1 / 8 b / 3]

m : ㅁ m m a r a m b i : 마람비 m a - r a m - b i (拒む) [1 / 4 a / 3]

n g : ㄱ ㄱ m a n g g i : 망기 m a ㄱ - g i (あと) [1 / 1 a / 6]

k : ㅋ k / 音節初頭 k o m s o : 콤소 k o m - s o (少ない) [3 / 4 b / 6]

 : ㅍ g / 音節末 s a k d a : 삭다 s a g - d a (老いた) [1 / 1 b / 3]

g : ㅍ g g e n e f i : 거너피 g ə - n ə - p i (行って) [1 / 1 a / 4]

h : ㅎ h h e n d u m e : 현두머 h ə n - d u - m ə (言うには) [1 / 7 a / 6]

t : ㅌ t / 音節初頭 t u r g u n : 툐곤 t u r - g u n (わけ) [1 / 1 a / 4]

 : ㄷ d / 音節末 u t h a i : 울해 ' u d - h a i (ただちに) [1 / 1 a / 5]

d : ㄷ d d a h a m e : 다하머 d a - h a - m ə (従って) [1 / 1 a / 5]

b : ㅂ b b e n e h e : 버너허 b ə - n ə - h ə (送った) [2 a / 1 / 1]

p : ㅍ p w e i p i n g : 위 핑 ' u ə i p i n g (圍屏) [1 / 9 a / 5]

f : ㅍ p f o n j i m e : 폰지머 p o n - j i - m ə (聞くには) [1 / 5 a / 4]

s : ㅅ s s e j e n : 서전 s ə - j y ə n (車) [1 / 1 b / 6]

ʃ : s y (ʃ a : ㅍ s y a)

t a ś a r a h a : 타샤라하 t a - s y a - r a - h a (誤った)
[1/4a/4]

: ś a s y a a ś ś a b u r e : 아샤샤부러 ' a - s y a - s y a - b u - r e
(動かす) [3/23b/3]

c : c y (c a : 차 c y a)

c o h o m e : 초호머 c y o - h o - m e (特に) [1/3a/5]

j : j y (j a : 자 j y a)

j a k a : 자카 j y a - k a (物) [1/4b/1]

l : ㄹ r l o h o : 로호 r o - h o (腰刀) [9/1b/1]

r : ㄹ r f o r o f i : 포로피 p o - r o - p i (ふり向いて) [7/14b/2]

y : y (y a : 야 ' y a)

y a m u n : 야문 ' y a - m u n (衙門) [1/5a/1]

(i y a : ㅍ y a)

n i y a l m a : 날마 n y a r - m a (人) [2/1b/1]

w : u (w a : 와 ' o a) , (w e : 위 ' u ə)

w a k a : 와카 ' o a - k a (~でない) [1/1a/3]

w e : 위 ' u ə (誰) [1/2a/2]

(u w a : ㅏ u a) , (u w e : ㅑ u ə)

j u w a n : 환 j y u a n (十) [10/20a/6]

s u w e : 쉬 s u ə (なんじら) [2/1b/3]

(u w a : ㅓ 와 u - ' o a) , (u w e : ㅕ 위 u - ' u ə)

t u w a : 투와 t u - ' o a (見ろ) [10/26b/2]

j u w e : 쥬위 j y u - ' u ə (二) [10/18a/1]

ḱ : 用例なし

ḡ : ㅍ g h ū w a n g ḡ a i : 황 개 h u a ŋ ḡ a i (黄蓋) [5/16a/4]

ḥ : 用例なし

t ś : c (t ś a : 차 c a)

t ś a i y a n g : 채 양 c a i ' y a ŋ (蔡陽) [2/1a/2]

d z : j (d z a : 자 j a)

d u n g d z o : 동조 d u ŋ - j o (董卓) [1/4b/4]

ž : z y (ž u : 쥬 z y u)

l i ž u : 리 쥬 r i z y u (李儒) [1/10b/4]

注) 「三譯総解」においては、字母žは、母音字uと結合した形しか現れない。

(3) その他

s y : 스 s w t a i s y : 태스 t a i - s w (太師) [1/4a/1]

d y : 用例なし

j y : 用例なし

t s i : 스 c w t s i t s i : 스스 c w - c w (刺史) [8/19a/6]

d z i : 즈 j w d z i j i n g : 즈 징 j w j i n g (子敬) [3/4b/2]

上の表から観察されるところのように、清学書（「三譯総解」）の満洲語ハングル表記は、概ね、併記された満文の字面にしたがって、満洲字を一つ一つ機械的にハングルに置換えたものであるが、ある満洲字に対しては、いくつかの異なるハングル表記が行われていることがある。いま、そのような、転写ハングルの一様さを欠いている場合のそれぞれについて、若干の説明を行いたい。

(1) e

満洲字 e には、ㅓ e と ㅡ w の 2 通りのハングル表記が見られるが、これについては、次章で考察を行う。

(2) ü

満洲字 ü には、ㅓ u と ㅓ u e の 2 通りのハングル表記が見られる。ü がそのいずれで転写されるかは、ü の前の子音字によって、決定される。「三譯総解」においては、満洲字 ü は、子音字 k, g, h、および y の後にしか現れないが、k, g, h の後の場合には ㅓ u で転写され、y の後の場合には ㅓ u e で転写される。この現象については、すでに、池上（1950, 1954, 1963）が、「漢清文鑑」等を資料として、詳細な研究を行っており、ここで再論する必要はない。

(3) i o

i o には、ㅓ y o と ㅓ y u と ㅓ i o の 3 通りのハングル表記が見られる。ほとんどの場合は、ㅓ i o と転写されており、ㅓ y o と ㅓ y u は、ごくまれに、漢語からの借用語について用いられているにすぎない。ハングル表記 ㅓ y u の例は、満洲字の文字連結 i o の o に対して、ハングル ㅓ o を当てずに ㅓ u を当てている点が注目される。しかし、このような表記は、この資料では、上に挙げた l i o i b u（呂布）という語にしか見られない。一方、池上（1950, 1954, 1963）・今西（1958）・崔（1969）・成（1984）は、辞典類に属する「漢清文鑑」においては、文字連結 i o の o に対してハングル ㅓ u を当てた形である ㅓ y u, ㅓ i u という転写が多く現れることを報告している。

8) n i o m b i : 늪비 n y u m - b i (寒さが骨まで透る) [漢清文鑑:217c]

9) b i o : ㅓ b i u (有るか) [漢清文鑑:170a]

cf.) b i o : ㅓ b i o (有るか) [三譯総解:1/6b/3]

清学書によるこのような表記の違いの原因については、さらに考察を要する。

(4) uwa, uwe

uwa, uweは、 $\text{ㅍ}ua, \text{ㅍ}u\text{ㅓ}$ のように一字で転写される場合と、 $\text{ㅍ}ㅜa, \text{ㅍ}ㅜ\text{ㅓ}$ のように二字で転写される場合の二通りがある。この現象についても、池上(1950, 1954, 1963)の研究があり、再論の必要はないが、そこでは、この書分けが満洲語の音韻上の区別・あるいは音声的な差異を表したものであろうと、述べられている。

4. 満洲字 e に対する 2 通りのハングル表記についての考察⁶⁾

前章において述べたところのように、清学書において、満洲字 e は、普通、 $\text{ㅍ}ㅓ$ で転写されるが、一部の語に現れる e については、 $\text{ㅍ}ㅜ$ で転写されることがある。いま、読本類から、満洲字 e がハングル $\text{ㅍ}ㅜ$ で転写された全語例を抽出すると、以下のとおりである。

(1) 「三譯総解」10巻

1) 必ず $\text{ㅍ}ㅜ$ で転写されるもの

A. 満洲語固有語

a i s e	: $\text{ㅍ}ㅓs$ 'a i - s u (～のではないか)	1 例
b e d e r e -	: $\text{ㅍ}ㅓ드러$ b e - d u - r e (退く)	37 例
b e s e r g e n	: $\text{ㅍ}ㅓ슬건$ b e - s u r - g e n (寝台)	5 例
d e r e	: $\text{ㅍ}드러$ d u - r e (～だろう)	13 例
d e r i	: $\text{ㅍ}드리$ d u - r i (～から)	1 例
f e s e r	: $\text{ㅍ}ㅓ슬$ f e - s u r (こなごなに)	2 例
h e s e	: $\text{ㅍ}ㅓ스$ h e - s u (旨)	5 例
m e d e g e	: $\text{ㅍ}ㅓ드거$ m e - d u - g e (消息)	1 例
s e -	: $\text{ㅍ}스$ s u (言う)	309 例

(s e m b i, s e m e, s e f i, s e r e, s e r e n g g e など)

t e t e n d e r e : $\text{ㅍ}ㅓ턴드러$ t e - t e n - d u - r e (～する限りは) 3 例

B. 漢語からの借用語

c u s e	: $\text{ㅍ}ㅓ스$ c y u - s u (竹子)	2 例
d e n g j a n	: $\text{ㅍ}등잔$ d u ㄱ - j y a n (燈蓋)	4 例
h e n g	: $\text{ㅍ}흥$ h u ㄱ (横)	1 例
h e o	: $\text{ㅍ}후$ h u o (侯)	11 例
h e o	: $\text{ㅍ}후$ h u o (后)	5 例
k e o	: $\text{ㅍ}코$ k u o (口)	3 例
m e i	: $\text{ㅍ}미$ m u i (羶)	1 例

sefu	: 스푸 sw-pu (師傅)	2例
seng	: 송 swŋ (生)	26例

2) ㅍとㅍの両方の転写が見られるもの

複数を表示する接尾辞 -se (～ら) の e に対するハングル表記には、ㅍとㅍの両方が見られる。まず、-se が 서 sə で転写される例は、全部で31例で、次のような用例が見られる。

baturu se	: 바투루 서 ba-tu-ru sə (勇者ら)	1例
ese	: 어서 'ə-sə (この者ら)	1例
gucuse	: 구쥬서 gu-cyu-sə (友ら)	3例
juse	: 쥬서 jyu-sə (子供ら)	9例
mergesse	: 멀거서 mər-gə-sə (智者ら)	2例
mergense	: 멀건서 mər-gən-sə (智者ら)	1例
muse	: 무서 mu-sə (我ら)	14例

一方、-se が 스 sw で転写される例は、6例で、次の用例が見られる。

li diyan se	: 리 단 스 ri dyan sw (李典ら) [2/10a/6]
aša sei	: 아샤 시 'a-sya swi (嫂らの) [2/18b/4]
aša se	: 아샤 스 'a-sya sw (嫂ら) [2/19b/4]
tsai dzung se	: 채 중 스 cai juŋ sw (蔡中ら) [6/25a/1]

tesei	: 터시 tə-sw i (彼らの) [9/6b/6]
tsōo in se	: 초 인 스 coo 'in sw (曹仁ら) [9/17b/5]

ちなみに、複数の接尾辞 -se の異形態である -sa に対して、스 sw と転写した特殊な例が、1例だけ見える。

jiyangjiyūn sa	: 장권 스 jyaŋ-jyuən sw (將軍ら) [6/6b/2]
----------------	--

このように、複数の接尾辞 -se は、「三譯總解」では、서 sə と 스 sw の2通りに転写されているが、上の用例を見る限り、どのような場合に 서 sə と転写され、また 스 sw と転写されるかは、予測することができないものようである。ただ、二三の例外を除いて、大体、それが前の語に連続される場合には 서 sə で転写され、前の語と分綴される場合には 스 sw で転写される傾向を認めることはできるが、十分に環境を指定することはむずかしい。

(2) 「清語老乞大」

A. 滿洲語固有語

aise	: 아스 'ai-sw (～のではないか)	2例
------	-----------------------	----

bedere-	: 버드리 bə-dw-rə (退く)	8例
dere	: 드리 dw-rə (~だろう)	11例
deri	: 드리 dw-ri (~から)	1例
fuseri	: 푸스리 pu-sw-ri (山椒)	1例
hengke	: 흥커 hwŋ-kə (瓜)	3例
hesē	: 허스 hə-sw (旨)	1例
se-	: 스 sw (言う)	121例
-se	: 스 sw (~ら)	97例
sebderi	: 섭드리 səb-dw-ri (陰)	2例
tetendere	: 터턴드리 tətən-dw-rə (~する限りは)	2例
useri	: 우스리 'u-sw-ri (ざくろ)	1例

B. 漢語からの借用語

cuse	: 츠스 cyu-sw (竹子)	2例
dengjan	: 등잔 dwŋ-jyan (燈蓋)	2例
dingse	: 딩스 diŋ-sw (頂子)	2例
feise	: 페스 pəi-sw (坏子)	1例
fengse	: 펑스 pəŋ-sw (盆子)	1例
gise	: 가스 gi-sw (妓子)	1例
hiyase	: 하스 hya-sw (匣子)	10例
kuwangse	: 콧스 kwaŋ-sw (筐子)	1例
leose	: 룬스 ruo-sw (樓子)	3例
mase	: 마스 ma-sw (麻子)	2例
puseli	: 푸스리 pu-sw-ri (舖子裡)	3例
sefu	: 스푸 sw-pu (師傅)	8例
wase	: 와스 'oa-sw (瓦子)	3例

なお、「清語老乞大」においては、複数の接尾辞の-seは、前の語と分綴される場合だけでなく、連続される場合にも、大体、스swと転写される。

nehusebe	: 너후 스버 nə-hu sw-bə (女中らを) [6/22b/1]
muse	: 무스 mu-sw (我ら) [1/10a/4]
andase	: 안다스 'an-da-sw (朋友ら) [1/15a/3]

ただし、juseの一語に関しては、そのseは、서səと転写される。

juse	: 쥬서 jyu-sə (子供ら) [1/9b/2]
------	----------------------------

(3) 「八歳児」

A. 滿洲語固有語

d e r e	: 드러 d w - r ə (~ だろ)	1 例
h e s e	: 허스 h ə - s w (旨)	1 例
s e -	: 스 s w (言う)	1 9 例
- s e	: 스 s w (~ ら)	1 例

B. 漢語からの借用語

y o o s e l a r a k ū	: 오스라라쿠' y o o - s w - r a - r a - k u (鍵をかけない ; y o o s e = 鑰匙)	1 例
-----------------------	---	-----

(4) 「小児論」

A. 滿洲語固有語

b e d e r e -	: 버드러 b ə - d w - r ə (退く)	1 例
d e r e	: 드러 d w - r ə (~ だろ)	1 例
s e -	: 스 s w (言う)	1 4 例

B. 漢語からの借用語

c u s e	: 쥬스 c y u - s w (竹子)	1 例
---------	-------------------------	-----

上の単語一覧から看取されることは、滿洲字 e に対するハングル表記の書き分けが、清学書ごとの若干の相違はあるものの、ほぼ単語により一定していることである。この点から見て、この書き分けは、転写の際の単なる書き誤りによるものではなく、何らかの滿洲語の発音上の差異を表そうとしたものであると考えられる。いま、この現象について、若干の考察を加えることとする。

中世及び近世朝鮮語におけるハングル ㅍ (ə) と ㅍ (w) の音価は、現代朝鮮語のそれとさしたる相違がなかったものと思われる。「訓民正音」解例本の制字解には、

「ㅍ (ə) 與 ㅍ (w) 同而口張」

「ㅍ (w) 舌小縮而聲不深不淺」

とある。ここで、口張・舌小縮とは、それぞれ開口度・及び舌の前後に関して言ったものであろう。したがって、ハングル ㅍ (ə) ・ ㅍ (w) は、中・近世朝鮮語においても、現代朝鮮語と同様、それぞれ [ə] ・ [w] の音価を持っていたものと考えられる。

このように推定された、中・近世朝鮮語におけるハングル ㅍ (ə) ・ ㅍ (w) の音価から、清学書に見られる滿洲字 e に対する 2 通りの表記は、この滿洲字が、ある場合には [ə] の音価を持ち、またある場合には [w] の音価を持っていたことを表すものと、一応予測することができる。しかし、ここで問題となるのは、清学書の滿洲語ハングル表記が、朝鮮語に対する表記法とは異なった別個の体系を有していた可能性である。清学書のハングル表記は、同時代の朝鮮語資料における表記体系と異なる

った面を確かに持っていた。例えば、前章で述べたように、「三譯総解」の満洲語ハングル表記には、満洲字特殊字母のㄷを転写するのにハングル Δz が使われているが、

10) l i ㄷ u : ㄷ) 李 r i ㄷ y u (李儒) [1/4a/1]

このハングルは、朝鮮語の表記においては、この時代にはすでに廃用されていたものである。「三譯総解」中の朝鮮語訳文においても、この文字は現れていない。このように、清学書の満洲語ハングル表記は、当時の朝鮮語の表記体系とは、必ずしも一致しない面を持っていたのである。したがって、叙上の満洲字 e に対する 2 通りのハングル表記の問題は、さらに、清学書独自の表記体系に照らして、すなわち、清学書において満洲語の表記に当てられたハングルの使用状況全般に鑑みて検討する必要がある。

清学書において、ハングル u は、満洲字 sy , $t\acute{s}i$, dzi の転写においても用いられる字母である。

11) s y t u : ㅅ ㅌ s u - t u (司徒) [三譯総解: 1/4a/4]

12) t \acute{s} i t \acute{s} i : ㅅ ㅅ c u - c u (刺史) [三譯総解: 8/19a/6]

注) ただし、この部分は、「満文三國志」では $sy sy$ 、また、「満漢合璧三國志」では $t\acute{s}i sy$ となっている。

13) f u d z i : ㅍ ㅅ p u - j u (夫子) [小兒論: 1/1a/3]

このことから、満洲字 e が時にハングル u で転写されている現象は、それが時には満洲字 sy , $t\acute{s}i$, dzi と同一の、または近似した音価を持っていたことを表すものと推測される。ところで、満洲字 sy , $t\acute{s}i$, dzi は、漢語からの借用語を表記するために作られたいわゆる特殊字母に属するものであるが、この3者は、それぞれ、

sy : (ピンイン方案の [si] に該当する漢字) 四、思、司など、

$t\acute{s}i$: (ピンイン方案の [ci] に該当する漢字) 慈、次、此など、

dzi : (ピンイン方案の [zi] に該当する漢字) 滋、子、資など、

を表記するのに用いられる。このことから、清学書において、満洲字 e に対し、時に、特殊字母 sy , $t\acute{s}i$, dzi に当てるのと同じハングル u を当てている現象は、満洲字 e が、漢語の「四、思、司、…」などに含まれる母音と近似した音価を持つ場合があったことを物語るものと言える。すなわち、満洲字 e が、多くの場合においては [ə] の音価を持っていたが、時には高母音 [i] あるいは [u] の音価を持つこともあったことを示すものであろう。

すでに、崔 (1969)・成 (1981, 1984) においても指摘されているように、満洲字 e がハングル u で転写されるのは、s や d など alveolar の子音に後続する場合に多い。このような環境において、高母音化の現象が起こることは、十分に可能なこ

とと考えられる。

つぎに、叙上の推測に対する傍証を、満洲語のその他の資料に求めることにする。

満洲語に関するその他の資料は、満洲字 e に 2 通りの音価があったことを、十分には伝えていない。「清文啓蒙」・「欽定清漢対音字式」・「増訂清文鑑十二字頭」等の漢字注音の中には、満洲字 e が、時に高母音 [i] あるいは [w] の音価を持つことがあったことを伝えるようなものは見当たらない。

14) e : 惡 [e], se : 塞 [se] など [清文啓蒙 : 卷 1]

15) e : 額 [e], se : 色 [se]・塞 [se] など [欽定清漢対音字式]

また、Adam (1873)、Harlez (1884) 等の満洲語諸文典の記述にも、この現象を伝えるものは見当たらない。

また、満洲語の口語を調査した諸家の報告にも、そのような現象を認めることはできない。たとえば、Рудневъ (1912)、服部 (1937, 1941)、河野 (1944) 等には、この現象は記述されていない。愛理満洲語を調査した王 (1984) も、母音 ə について、

「ə 的舌位介于 [w] 与 [ə] 之間」p. 55.

とは伝えるが、この母音が、時には [ə] の音価を持ちまた時には [w] の音価を持つということまでは、述べていない。また、黒龍江省富裕県三家子屯の満洲語口語を調査した清格爾泰 (1982) の報告にも、叙上の現象は見られない。

しかし、Shirokogoroff (1924) の次の注記は、満洲字 e が、時には、漢語の「四」の母音と近似した音価を持つことを伝えている。

「e — has no equivalent in English and is a very “back” e ; sometimes it approaches to the Russian sound i in s i n (son) or Chinese sound i in s i (four).」p. IV.

この記述は、用例などが示されていないので、不明瞭であるを免れえないが、おそらく、これは、満洲字 e が時に高母音 [i] あるいは [w] の音価を持つことがあったことを伝えるものと思われる。

また、最近、季永海・他 (1989) が富裕県三家子屯の満洲語口語について行った報告においても、

「ə 可以与 w 自由变读」p. 6.

と、満洲文語の e が時に高母音 [w] の音価を持つことがあることを伝える記述が見られる。

最後に錫伯語口語の例を挙げる。「錫伯語簡志」、「錫伯語口語研究」によれば、満洲文語の e は、錫伯語口語において、だいたい ə に対応している。ところが、時に、高母音の i で現れる場合がある。

(以下の錫伯語口語は、「錫伯語口語研究」の綴字に拠る)

錫伯語口語	滿洲文語	意味
besirhen	besergen	寢床
dih	dehi	四十
dirhi	dergi	上、西(滿洲文語では東)
eldeshim	eldešemb i	きらめく
ershim	eršemb i	世話をする
ezhilem	ejelemb i	占領する
ezhim	ejemb i	書き記す
fuduzhim	fudejemb i	ほころびる
fususuzhim	fusejemb i	破れる
hezhim	hejemb i	あえぐ
jirhi	jerg i	等級、～など
sengsim	sengsemb i	乾く
sim	semb i	言う
simezhen	semejen	腸をおおう油
simkel	sengkule	にら
sizhen	sejen	車
suasilem	šuwaselemb i	刷毛で塗る、印刷する
tems im	temšemb i	争う
uzhin	ujen	重い
zhim	jemb i	食べる

上の語例のほか、さらに、「錫伯語簡志」p.43には、離格助詞—dər i (滿洲文語ではder i) が、—diri という異形態を持つことを伝えている。

このように、錫伯語において、滿洲文語のeが高母音iで現れるのは、d・j・s・šなど歯音系の子音に後続する場合に多いようであるが、これは、滿洲字eが、そのような環境においては、時に高母音化することのあった可能性を示唆するものであり、清学書で滿洲字eがハングル—uで転写されていることと同軌の現象であると考えられる。

5. 結論

以上、本論文においては、清学書において、滿洲字eに対して2通りのハングル表記がなされている現象をとりあげ、考察を試みた。各章において得られた結果を略記すると以下のとおりである。

まず、第2章において、清学書読本類の書誌的概要を述べたあと、第3章で、

「三譯総解」を例にとり、清学書読本類における満洲字と転写ハングルの全般的な対応関係を観察した。その結果、清学書の満洲語ハングル表記は、概ねは併記された満洲文字をただ単にハングルに置換えただけの、転字的な性格の強いものであるが、ある満洲字に対しては、いくつかの異なるハングル表記が見られることがあることが確認された。

つぎに、第4章では、このような特殊な場合の中から、特に、満洲字 e に対して 2通りのハングル表記がなされている現象を取上げ、考察を行った。まず、清学書読本類から、満洲字 e が *w* で転写された全語例を抽出・提示することによって、このような満洲字 e に対するハングル表記の書分けが、各清学書ごとの若干の相違はあるものの、ほぼ単語により一定していることを確認した。つぎに、清学書において、ハングル *w* が、満洲字特殊字母の *sy*, *tsi*, *dzi* の転写にも用いられる字母であることに着目し、満洲字 e が時にハングル *w* で転写されている叙上の現象は、満洲字 e が時に特殊字母の *sy*, *tsi*, *dzi* と近似した音価を持つ場合があったことを示すものであることを指摘した。そして、特殊字母の *sy*, *tsi*, *dzi* は、それぞれ、漢語の (*sy*) 四・思・司、(*tsi*) 慈・次・此、(*dzi*) 滋・子・資などを表記するのに用いられる字母で、高母音の [i] を含むものと考えられることから、満洲字 e に対する叙上の書分けは、満洲字 e が、時に高母音の [i] あるいは [u] の音価を持つことがあったことを示すものと推測した。そして、さらに、そのような推測が、満洲語口語についての Shirokogoroff (1924) および季永海・他 (1989) の報告や、錫伯語口語の一部の単語において、満洲文語の e が高母音で現れる事実等にも、傍証を得ることができることを述べた。

注

1) また、転写ハングルの区別がなされている場合においても、編纂の際に基づいた底本が未だ十分明らかでない資料の場合には、そのハングル表記がはたしてどの満洲字に対応するものであるかを判断することは難しい。成 (1984) p. 39において述べられているように、「同文類解」の下巻 11a には、「寺院」がハングル *sw* で転写されているが、これは、満洲語綴字の *se* を転写したものであるのか、*sy* を転写したものであるのか判断しがたい。「同文類解」では、一般に、満洲語綴字の *se* に対しては *sw* の、また *sy* に対しては *sw* のハングル転写を与えるが、「同文類解」の底本の一つと考えられる「広彙全書」[1/20a] には、「寺 *sy*」となっていることから、「同文類解」中の「寺院」の *sw* は、あるいは、満洲語綴字の *sy* を表記したものであるかも知れない。

2) 「清語老乞大新釈序」、「重刊三譯総解序」、および「三譯総解原序」の記載に拠る。

3) この拙論：「『三譯總解』底本考」は、『알타이학보』[アルタイ学報]第2号(ソウル:The Altaic Society of Korea)に掲載される予定である。

4) Fuchs(1966)の口絵(TAFEL13)およびpp.78-80(No.142-145)には、漢文の「小児論」を収録したいくつかの日用類書が挙げられている。また、東京大学の東洋文化研究所に所蔵される「新鐫卓吾先生通考指掌雜字」(No.子/類書/132)と題する日用類書にも、漢文の「小児論」が収められている。

5) 各清学書の転写ハングルの使用の実態と、清学書間の相違については、成(1984)に、比較的詳しい調査が行われている。

6) 清学書において満洲字 e に2通りのハングル表記がなされている現象について言及した過去の研究は、以下の通りである。

清学書のハングル表記を、満洲語音韻の研究資料としてはじめて利用した池上(1950, 1954, 1963)は、ハングル表記が一樣さを欠いている3つの場合(満洲字 \bar{u} 、 $i o$ 、 $u w a \cdot u w e$ に対するハングル表記)についての考察は行ったが、満洲字 e に対する書分けについては扱わなかった。清学書に満洲字 e に対する書分けが見えることを初めて報告したのは、今西(1958)であるが、そこでは、「漢清文鑑」のハングル表記について次のように述べられている。

「[e] 어、ə 又は 으、u

(中略)「満・細」では殆ど皆 어、ə を使う。例えば [e] は 어、ə、[eng] は 영、əŋ、[geng] は 경、gəŋ、[teng] は 텡、təŋ、[bei] は 비、bəi、[sen] は 선、sən の如きである。ただ [sembi] に限り (se. seme. sehe 等の変化形を含む) 必ず 으、u を使う。스、su、스며、sumə、슴비、sum-bi の如きである。しかし [kanse] 칸스、kan-sw の如きも見当り、探したらこの類もなおあろうかと思うが、大体に於てすべて 어、ə であり、ただ [sembi] だけが、으、u であることには例外がない。この理由は分らない。(後略)」p.43.

次にこの現象について言及を行ったのは、崔(1969)であるが、そこでは、今西(ibid.)と同じ「漢清文鑑」を資料として、満洲語の se や de という音節中の e に対して、으、u のハングル表記が多く現れることが指摘されている。

金(1973)は、「清語老乞大」を主な資料として、満洲字 e に対するハングル転写の書分けの実態を報告している。

さらに、津曲(1977, 1978)も、満洲字 e に対するハングル転写の書分けが、「清語老乞大」に現れ、それが、単語によって一定していることを、述べている。

成(1981)は、この満洲字 e に対するハングル転写の書分けの問題を、「同文類解」を資料として、考察し、満洲字 e が $-w$ で転写されている例が、付属語として用いられる語に多く現れる事実を指摘したうえで、

dere: 더러 dɔ-rɔ (顔) [同文類解上/14b]

dere: 드러 du-rɔ (~だろう) [同文類解下/49a]

この表記はおそらく母音の弱化を示すものであろうと、推測している。

成(1984)は、この問題を、さらに、その他の清学書一般についても、調査し、大體、成(1981)と同じ内容の主張を行っている。

参考文献

- 服部四郎(1937)「滿洲語音韻史の爲めの一資料」『音声の研究』第6号, 279-294.
- _____(1941)「吉林省に滿洲語を探る」『言語研究』第7・8号, 47-67.
- 池上二良(1950)「滿洲語の諺文文献に関する一報告」『東洋学報』第33卷第2号, 97-118.
- _____(1954)「滿洲語の諺文文献に関する一報告(承前)」『東洋学報』第36卷第4号, 57-74.
- _____(1955)「トゥングース語」市川三喜・服部四郎編『世界言語概説』下巻 441-488. 東京: 研究社.
- _____(1963)「ふたたび滿洲語の諺文文献について」『朝鮮学報』第26輯, 94-100.
- _____(1986・1987・1987)「滿漢字清文啓蒙に於ける滿洲語音韻の考察」(1)・(2)・(3)『札幌大学・女子短期大学部紀要』第8号(通卷28号), 1-26・第9号(通卷29号), 1-24・第10号(通卷30号), 1-26.
- 今西春秋(1958)「漢清文鑑解説」『朝鮮学報』第12輯, 21-58.
- _____(1966a)「五體清文鑑解題」田村實造・今西春秋・佐藤長編『五體清文鑑譯解』上巻 京都: 京都大學文學部内陸アジア研究所.
- _____(1966b)「清文鑑-単體から5體まで」『朝鮮学報』第39・40輯, 121-163.
- 河野六郎(1944)「滿洲国黒河地方に於ける滿洲語の一特色」『学叢』第3輯. 京城: 京城帝国大学文学会. (『河野六郎著作集』第一巻(1979), 537-556. 東京: 平凡社)
- 小倉進平(1940)『増訂朝鮮語學史』東京: 刀江書院.
- 落合守和(1985a)「《増訂清文鑑》十二字頭の三合切音」『静岡大学教養部研究報告』人文・社会科学篇第20卷第2号, 75-99.
- _____(1985b)「《清漢対音字式》に反映した18世紀北京方言の音節体系」『静岡大学教養部研究報告』人文・社会科学篇第21卷第2号, 171-214.
- _____(1986)「《滿漢字清文啓蒙》に反映された18世紀北京方言の音節体系」

- 『静岡大学教養部研究報告』人文・社会科学篇第22巻第2号, 111-151.
- 鄭光 (1978) 「司訳院訳書の外国語の発音転写について」 『朝鮮学報』第89輯.
- 津曲敏郎 (1977・1978) 「清語老乞大の研究—滿州語研究のための—資料」(1)・
(2) 『札幌商科大学・札幌短期大学論集』人文編第21号, 211-248・第22号,
161-193.
- 渡部薰太郎 (1930) 『滿洲語綴字全書』亜細亞研究第九号 大阪: 大阪東洋学会.
- 季永海・趙志忠・白立元 (1989) 『現代滿語八百句』 北京: 中央民族学院出版社.
- 李樹蘭・仲謙 (1986) 『錫伯語簡志』 北京: 民族出版社.
- 李樹蘭・仲謙・王慶豊 (1984) 『錫伯語口語研究』 北京: 民族出版社.
- 清格爾泰 (1982) 「滿洲語口語語音」 『内蒙古大学記念校慶二十五周年學術論文集』, 23-73.
- 王慶豊 (1984) 「愛琿滿語概況」 『民族語文』第5期, 55-66.
- 趙傑 (1988) 「錫伯語滿語語音演變的比較」 『民族語文』第1期, 32-37.
- 金貞秀 (1973) 「청어노걸대의 한글 전사법과 그 혼란에 대해서」 [清語老乞大のハングル転写法とその混乱について] ソウル大学校大学院言語学科言語学専攻碩士論文.
- 閔泳珪 (1956a) 「解題」 『八歲児・小兒論・三譯總解・同文類解』, 1-10. ソウル: 延禧大學校東方學研究所.
- _____ (1956b) 「解題」 『韓漢清文鑑』, 1-13. ソウル: 延禧大學校東方學研究所.
- _____ (1964) 「滿洲字 小兒論과 敦煌의 項託變文」 [滿洲字小兒論と敦煌の項託變文] 『李相佰博士回甲紀念論叢』, 321-332. ソウル: 乙酉文化社.
- 成百仁 (1974) 『滿洲샤만神歌 n i s a n s a m a n i b i t h e』 [滿洲シャーマン神歌] ソウル: 明知大學出版部.
- _____ (1975) 「滿洲語音韻史研究을 위하여—清文啓蒙異施清字研究—」其二 [滿洲語音韻史研究のために] 『明大論文集』第8輯, 137-161. ソウル.
- _____ (1976) 「滿洲語音韻史研究을 위하여—清文啓蒙異施清字研究—」其一 [滿洲語音韻史研究のために] 『언어학』 [言語学] 第1号, 73-98. ソウル: 韓國言語學會.
- _____ (1981) 『만주어 음운론 연구』 [滿洲語音韻論研究], ソウル: 明知大學出版部.
- _____ (1983) 「《漢清文鑑》에 대하여」 [「漢清文鑑」について] 『金哲堧博士華甲紀念史學論叢』, 867-887. ソウル: 知識産業社.

_____ (1984) 「譯學書에 나타난 訓民正音 使用—司譯院 清學書의 만주어 한글 표기에 대하여—」 [訳学書に現れた訓民正音使用—司訳院清学書の滿洲語ハングル表記について—]、『韓國文化』第5号, 21-63. ソウル.

_____ (1986) 「初期 滿洲語 辞典들에 대하여」 [初期滿洲語辞典について] 『東方學志』第52輯, 219-258. ソウル: 延世大學校國學研究院.

李基文 (1973) 「十八世紀의 滿洲語 方言 資料」 [18世紀の滿洲語方言資料] 『震檀學報』第36号, 99-132. ソウル: 震檀學會.

崔鶴根 (1969) 「影印本『韓漢清文鑑』에 對해서」 [影印本「韓漢清文鑑」について] 『文湖』第5号 ソウル: 建國大學校 (『알타이 語學論攷』 [アルタイ語學論攷] (1980) ソウル: 玄文社)

Adam, L. (1873) Grammaire de la langue mandchou. Paris: Maisonneuve.

Fuchs, W. (1966) Chinesische und Mandjurische Handschriften und Seltene Drucke. (Verzeichnis der orientalischen Handschriften in Deutschland, 12, 1) Wiesbaden: Steiner.

Harlez, C. (1884) Manuel de la langue mandchoue. Paris: Maisonneuve.

Lie, H. (1972) Die Mandschu-Sprachkunde in Korea. (Uralic and Altaic Series 114) Bloomington: Indiana University Publications. The Hague: Mouton.

Seong, B. (1985), "A Note on Early Manchu Dictionaries," Proceedings of International Conference on China Border Area Studies. Taipei: National Chengchi University.

Shirokogoroff, S.M. (1924) Social organization of the Manchus. Shanghai: Kelly & Walsh.

Рудневъ, А. (1912) Новыя данныя по живой манджурской рѣчи и Шаманству. С. — Петербургъ.

『大清全書 daicing gurun i yooni bithe』2帙15冊, 沈啓亮編, 康熙22年(1683)秋八月開刊, 康熙癸巳(1713)重鑄, 三義堂藏板, 京都(北京)西河沿尊古堂書坊發兌, 京都大学文学部所蔵.

『御製五體清文鑑』上中下卷(1957) 北京: 民族出版社影印。(故宮博物院所蔵本)

『御製增訂清文鑑』32卷総綱8卷補編4卷補編総綱1卷統入新語2卷, 乾隆36年

(1771) 序, 京都大学文学部所蔵.

『八歳児・小児論・三譯総解・同文類解』(1956) ソウル: 延禧大學校東方學研究所影印。(ソウル大 schools 奎章閣所蔵本)

『韓漢清文鑑』(1956) ソウル: 延禧大學校東方學研究所影印。(日本 東京大学図書館所蔵本)

『韓漢清文鑑索引』(1960) ソウル: 延世大學校東方學研究所.

『欽定清漢対音字式』, 道光16年(1836)序, 聚珍堂, 北京, 京都大学文学部所蔵

『滿漢字清文啓蒙 manju nikan hergen i cing wen ki meng bithe』四卷, 寿平著述, 雍正庚戌(1730)程明遠序, 三槐堂梓行, 北京, 京都大学文学部所蔵.

「清語老乞大」(1964) 『人文科学』第11輯・第12輯 ソウル: 延世大學校人文科學研究所影印。(パリ東洋語学校図書館所蔵本)

『通文館志 全』朝鮮群書体系系統第十七輯(1913) 京城: 朝鮮古書刊行会油印(哲宗13年重刊本).

『譯官上言謄録』 ソウル大 schools 奎章閣所蔵(図書番号12063).

(きしだ ふみたか、博士後期課程)